

# 石をもて追われる如く シェリーとダブリンの人々

石原 武

「このドン・キホーテは、救おうと願った奴隷たちから石を投げられた」と、アンドレ・モロワは、ダブリンにおけるシェリーの滑稽で散漫な騎士ぶりを書いている。（『エアリアル』 「シャボン玉」）

昨年初夏、私はダブリンで過ごした数日、シェリーとハリエットの若夫婦がピラを配って、魂の救済を呼びかけたというサクビル・ストリートを探して行きつ戻りつしたが、その地名も、シェリーなるロマン派詩人の奮闘も、ダブリンの人々の歴史の記憶には全く存在していなかった。‘Dear Dirty Dublin’ と、ジョイスにいわせた暗い街々は少しばかり舗道を化粧して近代的な顔つきに変わってきているものの、運河を渡る男や女は貧しく、酔漢も相変わらずだった。シェリーはここで、<酒を断って正気になれ>と訴えた。勿論、自身も酒や肉を断ち、菜食主義者のドン・キホーテも大真面目に演じた。たかる者はあっても本気でシェリーの理想主義に近寄るものはいなかった。聖パトリックの夜にはみんな酔払って、城に集まった。舞踏会に英本国の征服者やダブリンの貴族たちが美しい衣装で馬車を乗りつけるからだった。襤褸を着た、食うや食わずの酔払いたちは一目それを見ようと押すな押すなをするのだった。こういうダブリンの人々にシェリーの理想主義は敗退した。かれの初めての手ひどい挫折だった。ダブリンの城は、黒ずんで、幽鬼のように、しかも威厳にみちて現存している。

ダブリンを追われたシェリーはウェールズへ向った。その経緯はまた別に書くとして、私もダブリンからの帰り道、セント・ジョーンズ海峡を渡って、ウェールズの港町スウォンジで二、三日を過ごした。のちにハリエットへの愛を失ったシェリーにほのかな慕情を寄せたあの薄倅な少女ファニーが、失恋のいたみから自裁した宿（マックワース・アームズ・イン）をあちこちに探したが、これも知る人もなく遠いロマネスクの片々だった。丘にはスグリの実が一面熟れて、ここでも革命児シェリーは異邦の人だった。

---

1988 年度卒業研究

On Women around P.B.Shelley.

新藤由佳子